

佳作

夢へのチャレンジ

秋田県横手市立横手北中学校

3年 松井 心愛

私の夢は、「外国の美術館で学芸員になる」ことでした。でも、大阪万博でのボランティアを経験して、「学芸員になる」から「学芸員になって美術の素晴らしさを多くの人に伝える」に変化しました。

私は夏休み中、横手市が募集したかまくらキャストの一員となり、3泊4日の日程で大阪に行ってきました。そこで大阪万博の「LOCAL JAPN 展」にあるかまくらブースで、中学生ボランティアとして活動しました。本物のかまくらの前で来場者が記念撮影をした際、私たちがかまくらについての説明をするという内容です。万博でボランティア活動をしたこと、いろいろなパビリオン（各国の展示館）の見学に行ったことで、私は学芸員に必要な三つの力を培うことができました。

一つ目はコミュニケーション力です。万博には年齢・性別・国籍関係なくいろいろな人が訪れます。ボランティアを通して、普段話す機会がない人たちとたくさん交流できたことは、自分にとって、とても貴重な体験になりました。時間は短かったけれど、知らない人との1対1のコミュニケーションを高められてよかったです。また、自分なりのコミュニケーションを見付けることができました。私はかまくらについて説明するとき、初めはうまくできるか心配で緊張していました。でも、来場者の方が笑顔で丁寧に接してくださったおかげで、私も自然と笑顔になれ、緊張がほどけてきました。また、私に「がんばってね。」と声をかけてくださった方も何人かいて、私はそれがとてもうれしかったです。このことから私は、笑顔は人の良心的な気持ちが伝わるものであると感じました。そしてコミュニケーションは、単なる意思疎通ではなく、心と心が通じ合う、お互いが笑顔になるために大切なものだと気付くことができました。だから、初めての人と話すときも自分にとって身近な人と話すときも、笑顔でいること、言葉遣いを良くすることなど、相手の心に自分の気持ちが伝わるように、自分なりに、コミュニケーションを工夫していきたいです。

二つ目は知る力です。私はボランティアの休憩中に、万博内にあるさまざまなパビリオンを見に行きました。そこでは、普段触れることができない国の文化、歴史について知ることができました。パビリオンは、大きさも展示方法もバラバラで、それぞれに工夫が施されています。例えば、オーストラリア館では自然の豊かさや最新技術が伝わるよう、没入型のアドベンチャーが楽しめる

展示として、大画面に国内の海・森などの自然の風景が映し出されていました。また、コロンビア館では、名産品であるカカオ豆や、モラと呼ばれる伝統的な布装飾などの展示を実際に見て、触ることができました。歴史の面で、トルコ館ではエルトゥールル号遭難事件についての説明、ポルトガル館では南蛮貿易に関する展示など、出展国と日本の関わりが深いものがありました。今まで本やインターネットでしか得ることができなかった海外の情報を、自分の肌で感じられたことは、自身の知見を広げることにつながりました。それと同時に、「展示」についての勉強をすることができました。学芸員の仕事は館内の案内だけではなく、展示資料の収集や、展示会の企画なども行います。万博のパビリオンで見た、国の雰囲気や文化、歴史が伝わる展示方法は、学芸員になるための参考になりました。

そして、三つ目がそれらの情報を「発信する力」です。ボランティアで見つけた自分なりのコミュニケーション、万博で学んだ多くの情報を、しっかりと吸収して伝えていく必要があります。情報を取り入れて活用する、「インプット・アウトプット」です。勉強にも使われる学習方法の一つですが、私は万博での経験を通して、日常で生かしていくことも大事だと思いました。コミュニケーションは人との会話でも、手紙を書くときにも活用することができます。万博で吸収した情報も、この作文に生かされています。そうやって言葉でも体でも、いろいろな方法で伝える練習をして、発信する力を高めていきたいと思いました。

私は美術のよさを多くの人に知ってもらうために学芸員になりたいです。そのためには、美術に関する知識、コミュニケーション力、情報発信力といったさまざまな力が必要です。万博での経験は、これらの力を培うための、とても貴重な機会になりました。でも、それで終わりではありません。これからの生活で、「自身の経験や取り入れた情報を活用する練習」をしていくことが大切です。だからこそ、日常生活の他に、学生のうちにいろいろなイベントやボランティアに参加して、コミュニケーション力などを高めていきたいと思います。これが私の「夢へのチャレンジ」です。